わたしだけの誰か

網中彰子（あみなかしょうこ）

恋のはじまりは、よいところだけを知ってもらおうとします。愛のはじまりは、互いに信頼し合うゆえに、愚かさ、弱さ、醜さも含めて知ってもらいます。「カッコいい」だけではなく「カッコ悪い」も受け入れる、恋から愛の道のりです。

人は皆、神さまの愛のうちに愛し愛されるために生まれます。しかしいつか必ず死が人々を別ちます。どんなに愛しても相手のすべてを見極めることも守りきることも出来ない。果たして人生とはそんな切ないものなのでしょうか。私が死んでも、大切なあの人は独りではない。委ねる存在があればこそ、生かされている日々にもまことの平安が訪れます。

最も私の近くにあり、本当の姿を知ってなお、永遠に一緒にいてくれる。そんな「わたしだけの誰か」を求めてさまよう魂がたどり着くのは、人があれこれ突き詰めた愛ではなく、いのちのはじまりである神さまの自由な愛の原点です。

愛は甘いささやきだけではありません。滅びの道を行こうとするなら、そちらではない、と手をとって共に引き返す。

罪とは自己中心な思い、悔い改めとは神中心へと歩みなおすことです。けれども、魂の案内人がいなければ戻る道さえわかりません。それが、神の子・主イエス・キリストです。

神の子が人の形をとって地上に生まれた。クリスマスとはキリスト・ミサ、救い主を礼拝するという意味の日です。

「教会のクリスマスの飾りつけって遅いですね」と言われてしまうくらい、世は 11 月初めからクリスマス・ムード。そして 12 月 26 日にはクリスマス・リースが迎春バージョンに様変わり。変わり目の早い世にあって、変わらぬ神さまの家である教会の暦は、キリストの誕生を待ち望む 12月 25日前の日曜日を含む 4 週間前から新しく始まります。

愛の原点である神と私たちを結び付けて下さる存在こそ、永遠の同伴者「わたしだけの誰か」。主イエス・キリストです。

私の師匠である牧師が説教で、キリスト教を一言で言いあらわすなら「インマヌエル・アーメン。神、我らと共に」と言いました。マタイの聖句にある通りです。「わたしだけ」の誰かではなく「わたしたち」と共におられる神は、今日もその一人を招いています。死から復活したイエスさまが、絶望を終わらせ、希望のはじまりとして今日も生きておられます。

晴れの日も雨の日も日曜日には礼拝が捧げられています。心が晴れていようと真っ暗闇であろうとかまいません。お近くに十字架のある教会を見つけたら入ってみてください。私にも初めての日がありました。礼拝の意味は分からなくてもそこに人がいて、ここに何かある。そう思って帰りました。何かを感じるだけで十分です。分かる、分からないは人の領域。信じる、信じないは神の領域ですから。あとは神さまにお任せです。